慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	住谷悦治著 日本経済学史
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.8 (1958. 8) ,p.732(78)- 737(83)
JaLC DOI	10.14991/001.19580801-0078
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580801-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評及び紹介

住谷悦治著『日本経済学史』

日本における経済学の研究が、最近まことにめざましいものであることは、つぎつぎに出版される多くの業績をみても明らかである。その研究分野が多岐にわたっていること、しかも大別してマルクス主義経済学と近代経済学という二つの学派が相対峙していることは、誰の眼にも明らかな特徴として映ずるであろう。しかしながら、わが国において経済学はいかに発展し、その研究はどのようにしてつづけられてきたかという点になると、われわれはあらためて明治初年の、日本資本主義の黎明期における偉大な先覚者たちに想いを馳せずにはいられない。

イギリス、フランス、ドイツそしてアメリカ合衆国などの先進資本主義諸国がまさに帝国主義的段階に突入しようとしていた前夜とも言うべき一八七〇年代に、ようやく近代的資本主義国家に転身しようとしたわが国は、一方において多くの封建的な残滓を払拭せざるままに、急速に近代化への途を歩まざるをえなかった。あらゆる

科学や芸術や技術が、文明開化の政策のもとに無差別に輸入移植されたのであって、当時の日本の政策は、その必要に応じて採択するという自主的な態度をもって西欧文明をうけいれたのではなく、資本主義生産の急速な発展による近代的な国家型態への推移のために、必要とされるものは何でも輸入するといういわばさしせまった要求にせまられた結果であって、われわれの経済学も、この意味では、決して例外ではなかった。アダム・スミスを始祖とする正統派経済学が、勃興するイギリス資本主義の発展のなかから、ブルジョア階級によってささえられ、そのイデオロギーとして形成され、またフリードリッヒ・リストにみられる保護貿易主義の理論は、先進国イギリスに拮抗する強力な資本主義を育て上げようとしたドイツ・ブルジョアジーの切なる願いの発露であった。ところが日本の経済学は、資本主義とブルジョア制度の移入および育成政策が、絶対主義的な明治政府の確立を通じてなしとげられるという基本的な矛盾のもとになされたため、その結果として相反する多くの理論が混在して不統一のままに混迷をつづけなければならなかった。明治初年における自由貿易主義と保護貿易主義との論争の如きはそれである。日本の経済学は、その出発にあたって以上のような運命を担わなければならなかったのである。

ここに紹介を試みようとする住谷悦治教授の「日本経済学史」は、およそ以上のような問題意識の上にたって本書をまとめあげられたようで、八〇年にわたる日本の経済学の発展のあとを辿るまことにユニークな労作である。本書は、つぎのような内容からなっている。

第一篇　西洋経済学の移入
　第一章　明治初期移入経済思想の概観
　第二章　自由主義経済学の基礎づけ
　第三章　自由主義経済学への道
　第四章　福沢諭吉と自由主義経済学の基礎づけ
　第五章　若山儀一と大島貞益―保護貿易論の紹介と主張
　第六章　天野為之―自由主義経済学の確立としての『経済原論』
　第七章　田口鼎軒と自由主義経済学
第二篇　社会政策学会の成立
　第一章　日本社会政策学会
　第二章　日本社会政策学会の主張と論争
第三篇　「学派」の成立としての日本社会政策学会の性格
　第一章　日本社会政策学会の社会的・思想的背景
　第二章　金井延と日本社会政策学会の理論
第四篇　前期における日本社会政策学者の理論
　第一章　桑田熊蔵の理論
　第二章　福田徳三の理論
第五篇　河上肇と高野岩三郎
　第一章　河上肇の思想的特質
　第二章　高野岩三郎の学問的貢献

筆者はここで、この書の全貌について詳細な紹介批判を試みようとするものではないし、またその任でもない。目次をみれば明らかなように、本書の特徴は、社会政策学会の歴史と理論について、およそ他の追随をゆるさないほどの綿密な研究がなされていることであろう。筆者は労働問題の研究に志す者として、第二篇、第三篇および第四篇を異常な興味をもって読んだのである。実に社会政策学会の歴史こそ、日本における資本主義発展の後進性の故に、経済学研究の意義と限界とをはっきりと示し、とりわけ、社会改良主義の日本における運命を、資本主義発展の制約と矛盾のなかに明らかにしたものであるといわなければならない。

神田孝平、福沢諭吉、若山儀一、大島貞益、天野為之、田口鼎軒等の先覚者によって輸入され紹介され、そして基礎づけられた日本の経済学は、初期の「致富の術」もしくは「世渡りの術」としての経済学から、自由主義と保護貿易主義との論争へと発展し、理論的にも政策的にも大いにその内容を充実させたのであったが、やがて日清戦争が終り、産業革命が開始され、資本主義の発展とその基礎の確立にともなって矛盾を明らかにするや、資本主義にたいする疑惑および理論的批判は、二つの方面からあらわれた。すなわち、ひとつは社会主義であり、他はドイツ歴史学派によって影響された社会政策学会によってである。この意味で、明治三〇年代における社会政策学会の創設は、日本における経済学研究の歴史上に、一転期を劃したものということができるであろう。

著者は、第二篇において社会政策学会の成立についてふれるにあたり、まず明治初年から二十年頃までのわが国の思想の根幹として、㈠フランス流の民権派、㈡イギリス流の功利派、㈢ドイツ流の国権派、㈣アメリカ流のキリスト教をあげる（一五三頁）。これらの指導的な理論のなかで、塾祖福沢諭吉のとなえた功利主義の主張は、ウエーランドの経済学を中心としてベンサム、ミルおよびスペンサーの思想にもとづくものであり、「徹底的に封建的階級観念の打破と四民平等の宣伝につとめ、金銭蔑視の謬想を矯正し、かつ独立自尊の観念を鼓吹したのであって、福沢、田口、天野を中心とした一連の理論は、自由放任主義への途を歩みつつあった現実の理論的反映であり」（一五三―一五四頁）、勃興しつつあった日本資本主義とブルジョア階級を支えていた指導的な理論であった。しかしながら資本主義の発展は、当然その対立物としての近代的労働者階級を生み出し、彼等の運動を激化させる。明治一五年一二月、肥前島原において樽井藤吉、赤松泰助によって創立された東洋社会党以来、自由民権運動のたかまりとともに労働運動も次第に盛んになった。すなわち明治一七年、秀英社の印刷工を中心としてはじめて労働組合が組織され、のちに佐久間貞一がこれを保護したが、しかしわが国における労働組合運動が本格的に開始されるに至ったのは、日清戦争後産業革命が進展して、労働問題や社会問題が盛んに論じられるようになった頃であった。かくして「日本社会政策学会は、明治の中頃にドイツへ留学したわが国の新鋭なる学徒が、当時資本主義ドイツ

帝国の学界の中心的勢力であった新歴史学派の影響のもとに研学して帰国し、折しもかれらが直面したるわが国の社会的・経済的情勢に鑑み、育くまれたる労資の矛盾を調和し、新興日本の発展――富国強兵のモットーに則って――に資せんとして明治二九年四月に創設したものである」（一六九頁）。当時の東京帝国大学教授和田垣謙三、金井延および進歩的な官僚桑田熊蔵等によって設立されたこの学会は、外国からの輸入のものであったばかりでなく、社会改良主義をかかげて当時ようやく識者の関心をよびおこしつつあった労資の対立の激化に対処しようとする実践的な気魄を有していたようである。だが「社会政策学会の最も恐れたところは、自らが穏健中正なりと信ずる社会政策が、世人によって社会主義と混同せられようとすることであった」（一七一頁）。

社会改良主義をモットーとし社会主義をひたすら排撃した社会政策学会が、みずから社会主義伝道の機関と誤解されることをおそれたのは、当時の社会主義運動および労働組合運動の昂揚の結果であった。試みに明治三〇年代初頭の社会運動の主なるものを列記すれば、三〇年三月足尾銅山鉱毒被害により、栃木、群馬の農民八〇〇人余、農商務省に陳情、同年四月、樽井藤吉等の「社会問題研究会」発会、同月、城泉太郎、高野房太郎、職工義友会により「職工諸君に寄す」を発表、同年七月、片山潜、高野房太郎、労働組合期成会を結成、同年一二月、鉄工組合結成、機関紙「労働世界」を発刊、明治三一年二月、日本鉄道のストライキ、同年四月、日本鉄道機関手、矯正会を結成、同年十月、村井知至、安部磯雄、片山潜、幸徳秋水等、社会主義研究会を結成。以上のような労働運動や社会主義運動の勃興にともない、明治三四年五月には、日鉄矯正会において「社会主義を日本に応用する」ことを目的とした日本社会民主党が、安部磯雄、片山潜、幸徳伝次郎、西川光次郎、河上清等によって結成され、その宣言が発表された。それは即日解散を命じられたけれども、当時の人々に大きな衝撃をあたえ、社会政策学者の心胆を寒からしめた。

ここにおいて、社会主義と社会政策の両者の区別を明らかにするため、かの有名な社会政策学会の「弁明書」なるものが発せられたのである。これは和田垣謙三、金井延、桑田熊三の連名のもとに発表されたが、これはすでに一年前の明治三三年の社会政策学会趣意書として発表したものをさらに拡大し、社会主義にたいして攻撃を集中したものであった。その有名な一節を引用してみよう。

「余輩は放任主義に反対す。何となれば極端なる利己心の発動と制限なき自由競争とは貧富の懸隔を甚だしくすればなり。余輩は又社会主義に反対す。何となれば現在の経済組織を破壊し、資本家の絶滅を図るは国運の進歩に害あればなり。余輩の主義とする処は、現在の私有的経済組織を維持し其範囲内に於て個人の活動と国家の権力とに依て階級の軋轢を防ぎ、社会の調和を期するに在り（中略）。近時我邦社会主義を標榜せるものあり。此の時に当って世間動もすれば社会主義と社会政策との間に劃然たる区別を立つることなく、余輩の主張する処を以て社会主義と混同する者あり。顧うに社会政策の秩序及び国家の安寧と相戻る処無きに反して、社会主義は現在の社会制度及国家組織を破壊するに非ずんば到底実行す可からざるものなることは学理の一定せる処にして、社会主義者も亦之れを承認せり……。」

以上のようにのべて、社会政策は、社会主義のように社会の経済進歩の最大要件としての自由競争と私有財産の両者を否定するのではなく、これらに制限を加えて階級間の軋轢を防ぎ、社会の調和を実現するものであることを強調し、最後に、社会政策こそは社会問題を解決する唯一の方法であって、社会主義の如きは「架空の臆説にして到底実行を期する能はざることを発見し」たとのべている。

これによってわれわれは、社会政策学会がどのような背景のもとに、いかなる現実的な課題に応えんがために登場してきたか、そしてまたその性格が何であったかについて、ほぼ想像することができよう。住谷教授によれば、社会政策学会の攻撃の対象が社会主義であったことはもちろんであるが、それと同時に、「新興資本主義の一面、政商たちを中心とした初期資本家群の無拘束なる労働搾取によって、資本の蓄積を開始したその放任主義であった……ことに断乎として社会主義を排撃し、資本主義制度の正当さを社会主義理論に対立して、理論的に解明し、支持することは資本家階級の歓迎すべきことであった」（一八八―一八九頁）。さらに住谷教授はその歴史的な役割についてつぎのように指摘される。「社会政策学会の存在

は、資本家階級にとっては、資本主義の合理化政策をもって労働者階級の階級意識を抹殺するに恰好のものであり、かつその学問的扮装の下に、資本主義制度の永久性を理論化してかれらの安眠剤となり、官僚国家にとっては、階級闘争の上に超然として全国民の上に善政を施し得る一種の立場のあること――よしそれは錯覚であり欺瞞であるとしても――を、理論的に支持し、そして最後に、近代的労働者すなわちプロレタリアートの解放運動、社会主義を極力排撃することによって資本主義的社会、ことに資本主義的国家に対して安穏なる存続の理論と方策とを与えんとするものであると」（一九〇頁）。

このように、日本社会政策学会の立場は、一方において自由放任主義に反対し、他方において社会主義にはげしい攻撃をあびせたものであり、結局は近代的なプロレタリアートの運動にたいして敵対する以外の何物でもなかったとしても、日本資本主義の一定の発展段階においてそれがはたした進歩的な役割は正しく評価されなければならない。明治二九年、当時の帝国大学の新進教授たちを中心として結成され、プロイセン的伝統をうけつぎながらも明治四〇年一二月にその第一回大会を開催し、大正一三年に正式に解散するまでの一八年間にわたる社会政策学会の歴史は、国中のすぐれた経済学者をすべて会員として日本の社会科学とりわけ経済学の発展のために、この学会が身をもって書き記した奮闘の歴史でもあった。この一八年間に日本の資本主義は大きく発展し変貌した。大逆事件、第一次世界大戦、ロシヤ革命、米騒動、関東大震災などの内外の大事件が日本をおそい、大きな衝撃をあたえると同時に、社会政策よりは、社会主義が、多くの人々をとらえ、社会政策の影は次第にうすれがちとなり、これがやがて社会政策学会の没落の大きな原因ともなったのであったが、しかしそのなかからまた多くのすぐれた社会政策学者が生れた。これらのすぐれた社会政策の理論家ないし実践家として、著者は、金井延、桑田熊蔵、豊原又男、福田徳三、高野岩三郎をあげて、その理論的立場と実践的役割とを浮き彫りにしておられる。とくに豊原又男のように日本のロバート・オーエンと称せられた佐久間貞一の思想的後継者でありながら、一般にあまり知られていない人物や、また桑田熊蔵の農業理論家としての側面などについて、具体的に論述されているのは興味深いものがあろう。そのほか、著者が親しく謦咳に接せられた金井、福田、高野の諸博士の思想や理論について、実に詳細にして周到な叙述がなされていることは言うまでもない。

とりわけ本書の最後の部分には、高野岩三郎博士と並んで河上肇博士について、かなりくわしくのべられている。のちにマルクス主義の理論的研究から実践活動に入り、ついに日本共産党に入党した河上博士も、その若き日は、熱烈な国家主義者であったという事実などは、それが自叙伝にはのべられていないところから、「知られざる反面」として、読者を微笑させるものがあろう。

以上、稚筆をもかえりみず、このユニークな労作の内容について、主として「社会政策学会」を中心として紹介を試みてきた。この書をひもとくことによって読者は、一貫してマルクス主義の立場に立たれる住谷教授の良心的にして学究的な息吹をみじかに感ずることができるであろうし、また伝記的な叙述の手法がゆたかにもちいられているため、これは、きわめて面白く読むことができる数少ない著作のひとつである。しかし本書のもっとも大きな特色は、何よりも日本における西洋経済学の輸入と発展が、自由主義経済学――社会改良主義としての社会政策学会――マルクス主義経済学と、その発展の歴史が著者によっていわば弁証法的に把握されている点であろう。筆者はここに本書のユニークな理由を見出すのである。だとすれば、率直に言って、日本におけるマルクス主義経済学の発展について、河上博士だけしかのべられていないのは、物足りない憾みがないだろうか。河上肇博士以外のマルクス主義経済学者についての評価はどのようにあるべきだろうか。本書を読み終って感じた疑問は、要するにこれであった。本書は日本における経済学の発展を著者独自の立場からまとめられたきわめて異色ある経済学史であることは論をまたない。筆者は経済学を学ぶ人々が、ひとりでも多く本書を読まれることをおすすめする。しかし問題はその後にある。すなわち、本書を手がかりとしこれを基礎として、われわれの世代が日本の経済学説史もしくは思想史にかんするよりすぐれたより体系的な労作をきづき上げることではないだろうか。（ミネルヴァ書房、昭和三三年一月発行、六五〇円）――一九五八・六・四――（飯田　鼎）

書評及び紹介

ねづ・まさし著

『批判日本現代史』

近年遠山茂樹「昭和史」、井上清「日本近代史」と続いてマルクス主義の立場から現代に関する歴史研究が発表された。またこれに対する批判として亀井勝一郎「現代史の課題」が提出された。亀井氏はそこで前記二者に代表される現代史家の画く歴史が「人間不在」の歴史であることを指摘し、一定の史観により史実をわりきることに強い疑問を表明した。こうしてこれらの人々をめぐり歴史に対する見方や態度、現代史の受けとり方等に関し一連の論争が行われるにいたった。ここに取り上げた「批判日本現代史」はこの論争から積極的に学びとり、正しい現代史の在り方を追求しようという意図で書かれたものである。著者がいう通り本書は体系的な、或いは一般的な歴史書ではなく、問題点の提出をねらいとしている。しかもそれは単に批判のための批判という形でなく、それらの問題点につき著者が独自に史実を読みとり、積極的な形でなされていることが本書の価値を高くしている。その批判は一方で林茂氏、竹山道雄氏等の保守的歴史家に向けられると共に、大部分は著者と同じマルクス主義陣営の歴史家達に向けられている。その批判は「歴史学は主観の学問ではない、文学でも創作でもない、事実にもとづいた科学